



赠送MP3 光盘

一番日本語菁華



日语故事中的 人生智慧

日本を知る『童話編』

请用这本书学习日语，品读人生
在阅读妙趣横生的日语故事的同时
学习丰富多彩的日语，聆听地道纯正的日语



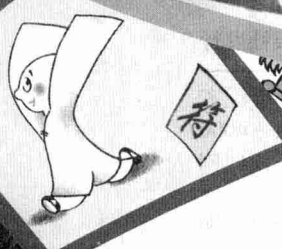
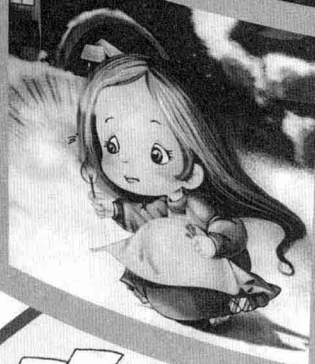
大连理工大学出版社

一番日本語菁華



日语故事中的 人生智慧

日本を知る『童話編』



大连理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日语故事中的人生智慧:汉日对照/《一番日本語》
编辑部主编. —大连:大连理工大学出版社, 2010.4
(一番日本語)

ISBN 978-7-5611-5509-7

I. ①日… II. ①一… III. ①日语—汉语—对照读物
②故事—作品集—世界 IV. ①H369.4:I

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2010)第069359号

大连理工大学出版社出版

地址:大连市软件园路 80 号

邮政编码:116023

发行:0411-84708842

邮购:0411-84708943

传真:0411-84701466

E-mail: dulp@dulp.cn

URL: <http://www.dulp.cn>

大连金华光彩色印刷有限公司

大连理工大学出版社发行

幅面尺寸:170 mm × 240 mm

印张:12

字数:178 千字

附件:光盘一张

印数:1~4000

2010年4月第1版

2010年4月第1次印刷

责任编辑:遆东敏

责任校对:王璐

封面设计:董振巍

ISBN 978-7-5611-5509-7

定价:24.00 元



主编寄语

人生是一条奔流不息的河，它有美丽的浪花，也有无情的漩涡；人生是一枝盛开的玫瑰花，它有娇艳的花朵，也有扎手的刺儿；人生是一杯卡布奇诺，它有奶油的香甜，也有咖啡的苦涩。

人生如棋，一步失误，满盘皆输；人生又不如棋，不能悔棋，失败了也不能再来一盘……

有成功，有失败；有快乐，有悲伤。这就是人生！需要努力奋斗的激情，还需要智者的经验和智慧。这就是人生！

英国科学家牛顿曾经说过这样一句话：“如果说我比别人看得更远些，那是因为我站在了巨人的肩膀上。” 聆听智者的教诲，学习成功者的经验，从来就是取得成功的捷径之一。

《日语故事中的人生智慧》就是这样一本充满智慧的书。阅读一个个经典小故事，与故事中的主人公共同分享智者的感言，相信您一定能受益匪浅。

茶余饭后，捧一杯香茗在手，翻一卷充满哲理的书，读一个个寓意深刻的故事，看正义战胜邪恶，真理战胜谬误，日语语言也因这些智慧有趣的故事而变得更绚丽多姿。

请翻开这本书，学习日语，品读人生！

2010年4月





目 录

マッチ売り少女	001	卖火柴的小女孩
くさったリンゴ	008	烂苹果
親指姫	016	拇指姑娘
物知り博士	023	万事通博士
人魚姫	030	小美人鱼
雪だるま	037	雪人
ガチョウ番の少女	044	牧鹅姑娘
三人兄弟	049	三兄弟
ホレのおばさん	054	霍勒大妈
お茶のポット	059	茶壶
二人の甚五郎	062	两个甚五郎
乙姫様のくれたネコ	067	龙宫仙女送的猫
ツルの恩返し	075	仙鹤报恩
去年の木	082	去年的树
爪と牙を取られたネコ	085	被拔掉爪子和牙齿的猫
本当の母親	094	真正的母亲
若返りの水	101	返老还童水
三枚のお札	104	三张护身符
カチカチ山	109	咔嚓咔嚓山
花咲じいさん	115	开花老爷爷
泥棒猫	120	偷东西的猫

ジャックと豆の木	125	杰克和豆蔓
黒薔薇姫	128	黑玫瑰公主
ロバの耳の王子	133	驴耳王子
鼠の嫁入り	136	老鼠嫁女
かしこいチビの仕立て屋	141	聪明的小裁缝
ロバとラバ	146	驴和骡子
男と死神	148	老人与死神
ミゼールと金貨	150	米赛尔和金币
恋に陥ったライオン	152	坠入爱情的狮子
熊と二人の旅人	154	熊和两名旅行者
多くの友を持つうさぎ	156	有很多朋友的兔子
カケスと孔雀	158	松鸦和孔雀
狐とコウノトリ	160	狐狸和鹤
金の卵を産むアヒル	162	下金蛋的鸭子
都会のねずみと田舎のねずみ	164	城市老鼠和乡下老鼠
猿と二人の旅人	167	猴子和两个旅行者
ロバとマルチーズ	169	驴和狗
牡鹿と猟師	171	雄鹿和猎人
王を望む蛙	173	渴望国王的青蛙
ライオンとネズミ	176	狮子和老鼠
ロバとその主人達	178	驴和它的主人们
蛙と牛	180	青蛙和牛
男とサテュロス	182	男子和萨提罗斯
北風と太陽	184	北风和太阳

う しょうじょ マッチ売り少女



ひどく寒い日でした。雪も降っており、すっかり暗くなり、もう夜——今年最後の夜でした。この寒さと暗闇の中、一人のあわれな少女が道を歩いておりました。頭に何もかぶらず、足に何もはいていません。家を出るときには靴をはいていました。ええ、確かにはいていたんです。でも、靴は何の役にも立ちませんでした。それはとても大きな靴で、これまで少女のお母さんがはいていたものでした。たいそう大きい靴でした。かわいそうに、道を太急いで渡ったとき、少女はその靴をなくしてしまいました。二台の馬車が猛スピードで走ってきたからです。片方の靴はどこにも見つかりませんでした。もう片方は浮浪児が見つけ、走ってそれを持って行ってしまいました。その浮浪児は、いつか自分に子供ができれば揺り籠^①にできると思ったのです。

それで少女は小さな裸の足で歩いていきました。両足は冷たさのためとても赤く、また青くなっておりました。少女は古いエプロンの中にたくさんマッチを入れ、手に一束持っていました。日がな一日^②、誰も少女から何も買いませんでした。わずか一円だって少女にあげる者はおりませんでした。寒さと空腹で震えながら、少女は歩き回りました。まさに悲惨を絵に描いたようです。かわいそうな子！ひらひらと舞い降りる雪が少女の長くて金色の髪を覆いました。その髪は首のまわりに美しくカールして下がっています。でも、もちろん、少女はそんなことなんか考えていません。どの窓からも蠟燭の輝きが広がり、鶯を焼いているおいしそうな香りがしました。ご存知のように、今日は大晦日です。

そうです、少女はそのことを考えていたのです。

二つの家が街の一角をなしていました。そのうち片方が前に迫り出しています。少女はそこに座って小さくなりました。引き寄せた少女の小さな足は体にぴったりくっつきましたが、少女はどんどん寒くなってきました。けれど、家に帰るなんて冒険はできません。マッチはまったく売れていないし、たったの一元も持って帰れないからです。このまま帰ったら、きっとお父さんにぶたれてしまいます。それに家だって寒いんです。大きなひび割れ③だけは、わらとぼろ切れてふさいでいますが、上にあるものは風が音をたてて吹き込む天井だけなのですから。

少女の小さな両手は冷たさのためにもうかじかんで④おりました。ああ！東の中からマッチを取り出して、壁にこすり付けて⑤、指を暖めれば、それがたった一本のマッチでも、少女はほっとできるでしょう。少女は一本取り出しました。「シュッ！」何という輝きでしょう。何とよく燃えることでしょう。温かく、輝く炎で、上に手をかざすとまるでろうそく蠟燭のようでした。すばらしい光です。小さな少女には、まるで大きな鉄のストーブの前に実際に座っているようでした。その炎は、周りに祝福を与えるように燃えました。いっぱい喜びで満たすように、炎は周りをあたためます。少女は足ものばして、あたためようとします。しかし、小さな炎は消え、ストーブも消えうせました。残ったのは、手の中の燃え尽きたマッチだけでした。

少女はもう一本壁にこすりました。マッチは明るく燃え、その明かりが壁にあたったところはヴェールのように透け、部屋の中が見えました。テーブルの上には雪のように白いテーブルクロスが広げられ、その上には豪華な磁器が揃えてあり、焼かれた鶯鳥はおいしそうな湯気を上げ、その中にはリンゴと乾しプラムが詰められていました。さらに鶯

いたことには、^が鶯^{ちょう}は^{さら}皿^{うえ}の上から^とぴよんと^お飛び^{むね}降りて、^{むね}胸にナイフとフ
 ークを^さ刺した^{ゆか}まま^{うえ}床の上を^{ある}よろよろと^{しょうじょ}歩いて、^{しょうじょ}あわれな少女の^{ところ}ところ
 まで^きやってきた^{あつ}のです。ちょうど^{つめ}そのとき、^きマッチが^{あつ}消え、^{つめ}厚く、^{つめ}冷た
 く、^{かべ}じめじめした^{のこ}壁だけが^{のこ}残りました。

^{しょうじょ}少女はもう一本^{いっぽん}マッチを^{しよ}ともしました。すると、^{しょうじょ}少女は^{さいこう}最高に^{おお}大き
 な^{した}クリスマスツリーの^{すわ}下に^{みせ}座って^{なか}いました。店の^{なか}ショーウインドウの中
 で^み見た^{たの}ことがある^{いろ}ような^あ楽しい^え色合いの^{しょうじょ}絵が^み少女を見^{しょうじょ}おろして^みいます。
^{しょうじょ}少女は^{りょうて}両手を^きそちらへ^きのばして、そのとき、^きマッチが^き消え^きました。ク
 リスマスツリーの^{ひかり}光は^{たか}高く^{たか}高く^{のぼ}上^{てんごく}って^{ほしほし}いき、もう^み天国の^み星々の^みように^み見
 え^{ひと}ました。その^{なが}うちの^お一つが^{なが}流れ^{ほのお}落ち、^お長い^お炎の^お尾^おとなりました。

「いま、^{だれ}誰かが^な亡^{しょうじょ}くなった^いんだわ！」と^{しょうじょ}少女は^い言^いいました。というの
 は、^{しょうじょ}おばあさん——^{あい}少女を^{ひとり}愛した^{ひとり}ことのある^{ひとり}たった^{ひとり}一人の^{ひとり}人、いまはも
 う^な亡^いき^いおばあさん——^いが^{ほし}こんな^{ひと}ことを^{なが}言^{なが}った^{なが}から^{なが}です。星^{ほし}が^{ひと}一つ、^{なが}流れ
 落ちるとき、^{たましい}魂^{ひと}が^{かみさま}一つ、^ひ神様の^あところへ^ひと^あ引き^あ上げ^あられる^あのよ、と。
 マッチをもう一本^{いっぽん}、^{かべ}壁で^{ふた}こすり^{あか}ました。すると^{あか}再び^{ひかり}明^{はな}る^{はな}くなり、その^{こう}光
 輝^きの中^{なか}におばあさんが^た立^{あか}って^{あか}いました。とても^{ひかり}明^{はな}る^{はな}く^{はな}光^{はな}を^{はな}放^{はな}ち^{はな}⑥、とて
 も^{にゆう}柔^わ和^{あい}で、^{あい}愛^{ひようじよう}にあ^{ひようじよう}ふれた^{ちい}表情^{ちい}をして^{ちい}いました。「おばあちゃん！」と小
 さな^こ子は^{おお}大きな^{こえ}声^{こえ}を^{わが}あげ^つました。「お願い、わたしを^つ連れて^つって！マッ
 チが^も燃え^もつきたら、おばあちゃんも^い行^いって^いしまう。あ^いった^いかい^いストーブ
 みたい^いに、おい^いし^いそう^いな^い鶯^い鳥^いみたい^いに、それから、あ^いの^い大きな^いクリスマ
 スツリー^いみたい^いに、おばあちゃんも^い消^いえて^いしまう！」

^{しょうじょ}少女は^{いそ}急^{ひとたば}いで、一束^{ひとたば}の^{かべ}マッチを^{かべ}あり^{かべ}った^{かべ}け^{かべ}壁^{かべ}に^{かべ}こすり^{かべ}付^{かべ}け^{かべ}ました。
 おばあさんに、^{たば}しっかり^{たば}そばに^{たば}いて^{たば}ほしか^{たば}った^{たば}から^{たば}です。マッチの^{たば}束は
 とても^{ひかり}ま^{はな}ば^{ひる}ゆい^{ひかり}⑦^{ひかり}光^{あか}を^{あか}放^{あか}ち、^{あか}昼^{あか}の^{あか}光^{あか}より^{あか}も^{あか}明^{あか}る^{あか}い^{あか}ほ^{あか}ど^{あか}です。このときほ
 ど^{うつく}おばあさんが^{おお}美^みしく、^{おお}大^みきく^み見^みえた^みことは^みあり^みませ^みん。おばあさん

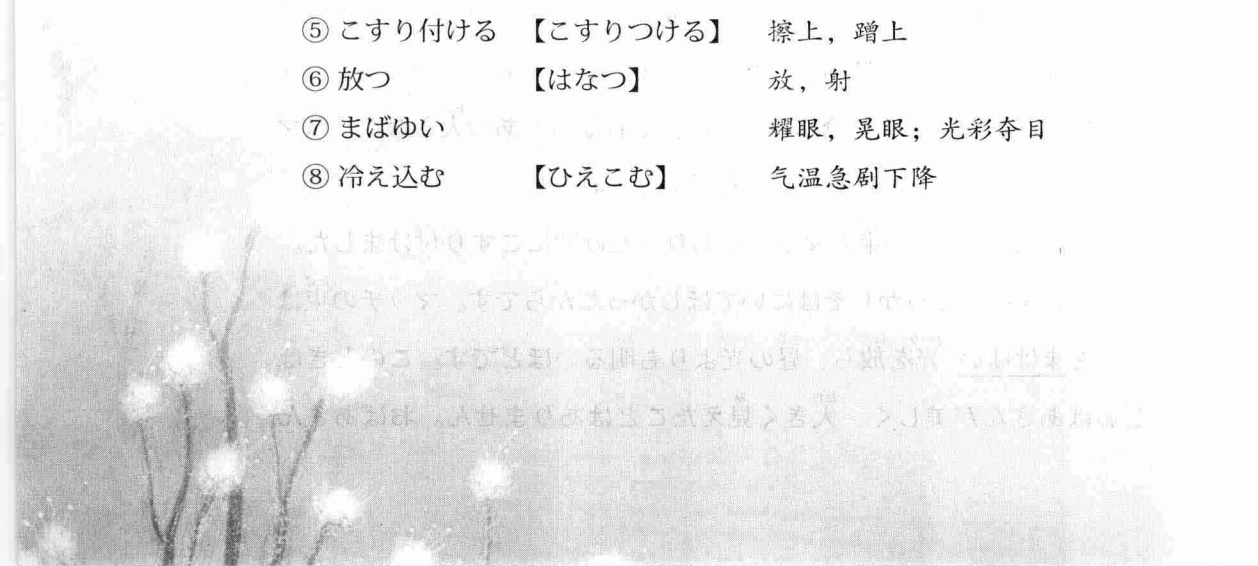
は、少女をその腕の中に抱きました。二人は、輝く光と喜びに包まれて、高く、とても高く飛び、やがて、もはや寒くもなく、空腹もなく、心配もないところへ——神さまのみもとにいたのです。

けれど、あの街角には、夜明けの冷え込む^⑧ころ、かわいそうな少女が座っていました。薔薇のように頬を赤くし、口もとには微笑みを浮かべ、壁にもたれて——古い一年の最後の夜に凍え死んでいたのです。その子は売り物のマッチをたくさん持ち、体を硬直させてそこに座っておりました。マッチのうちの一束は燃えつきていました。

「あったかくしようと思ったんだなあ」と人々は言いました。少女がどんなに美しいものを見たのかを考える人は、誰一人いませんでした。少女が、新しい年の喜びに満ち、おばあさんといっしょにすばらしいところへ入っていったと想像する人は、誰一人いなかったのです。

单词角 ●

- | | | |
|----------|-----------|------------|
| ① 揺り籠 | 【ゆりかご】 | 摇篮 |
| ② 日がな一日 | 【ひがないちにち】 | 从早到晚，整天 |
| ③ ひび割れ | 【ひびわれ】 | 龟裂，裂痕 |
| ④ かじかむ | | 冻僵 |
| ⑤ こすり付ける | 【こすりつける】 | 擦上，蹭上 |
| ⑥ 放つ | 【はなつ】 | 放，射 |
| ⑦ まばゆい | | 耀眼，晃眼；光彩夺目 |
| ⑧ 冷え込む | 【ひえこむ】 | 气温急剧下降 |



卖火柴的小女孩

数九寒天。雪花飘洒，夜幕降临。这是今年的最后一夜。一个可怜的小女孩独自行走在寒冷且黑暗的街头。光着头，赤着脚。是的，她离开家的时候还穿着一双鞋，确实穿着鞋。不过，鞋没起什么作用。那双鞋非常大，以前一直是她妈妈穿着的。在她匆忙穿过街道之时，两辆马车急驰而过，吓得她把鞋子都跑掉了。有一只鞋，她怎么也找不到。另一只又被一个流浪儿拣起来抢跑了。她在想等那个流浪儿将来有了孩子的时候，可以把它当作一个摇篮。

现在，小姑娘只好光着一双小脚走路了。这双脚已经冻得又红又紫。她的旧围裙里兜着许多火柴，她手中也拿着一把火柴。这一整天谁也没有向她买过一根火柴，谁也没有给过她一个铜板。她又饿又冷，哆嗦着来回走。这简直是一幅凄惨的画面。可怜的小女孩！雪花盖住了她金黄色的长发。头发卷曲地散在她的肩上，看起来非常美丽。不过她并没有想到自己的美。所有的窗子里都映照着蜡烛的光，街上飘着一股烤鹅的香味。因为今天是除夕。是的，她在想，今天是除夕。

她在两座房子（一座比另一座更向街心凸出一点）所构成的一个墙角里坐下来，缩成一团。她把她的一双小脚也缩了进去，不过她感到更冷了。但，她不能冒险回家。因为她没有卖掉一根火柴，没有赚到一个铜板。如果就这样回去，她的父亲一定会打她。而且家里也是很冷的。他们什么也没有，头上只有一个屋顶，风可以从顶上吹进来，虽然最大的裂口已经用草和破布堵起来了。

她的一双小手几乎冻僵了。唉！哪怕一根火柴对她也是有好处的。只要她抽出一根来，在墙上擦一下，暖一暖手就好了！她终于抽出了一根。“哧！”火柴发出光，燃起来了！当她把手覆在上面的时候，它便成了一朵温暖的、明亮的火焰，活像一根小小的蜡烛。这是



一道美丽的微光！小姑娘觉得自己仿佛坐在一个大大的铁火炉面前。火焰犹如传递祝福一般在燃烧，饱含喜庆般温暖身边。小姑娘刚刚伸出她的一双脚，打算取暖。忽然小火苗熄灭了，火炉也不见了。手中只残留一根烧过的火柴梗儿。

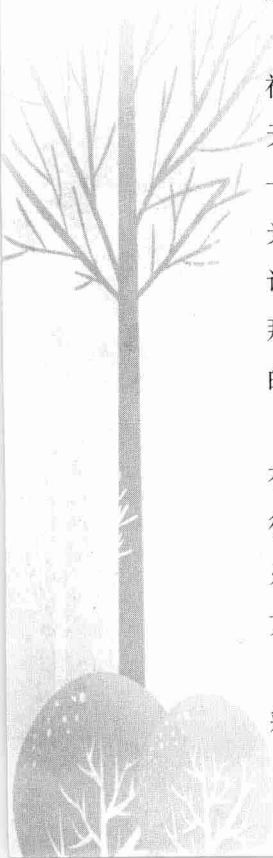
又擦了一根。火柴燃起来了，发出光芒。墙上的那块被亮光照着的地方，现在忽然变得透明，像一片薄纱一样，她可以看到房间里的东西。桌上铺着雪白的台布，上面放着精致的餐具，其中装满了梅干和苹果、冒着香气的烤鹅。更美妙的是，这只鹅从盘子里跳下来，胸膛上插着刀叉，蹒跚地在地板上走着，一直向这个穷苦的小姑娘走来。正在这时火柴熄灭了，在她面前只有一堵又厚又冷的墙。

她又擦了一根火柴。现在她是坐在最高的圣诞树下。一些跟在商店橱窗里见过的那样美丽的画面在向她眨眼。小姑娘把她的两只手伸过去，这时火柴熄灭了。圣诞树的亮光越升越高，现在她看到它们变成了一些明亮的星星。这些星星中有一颗落下来，划了一道长长的痕迹。

“现在又有一个什么人死去了啊。”小姑娘这样说道。因为她的祖母（她是惟一待她好的人，但是现在已经死去了）曾经这样说过。天上落下一颗星，地上就有一个灵魂到上帝那儿去。她在墙上又擦了一根火柴。火柴把四周都照亮了，在这亮光中祖母出现了。她散发着光亮，那么温柔，那么和蔼。“祖母！”小姑娘叫起来。“求求您！请把我带走吧！我知道，这根火柴一灭掉，您就会不见的。您就会像那个温暖的火炉，那只美味的烤鹅，那棵大大的圣诞树一样消失不见的！”

于是她急忙把剩下的整把火柴都擦亮了。因为她非常想把祖母留在身边。这些火柴发出强烈的光，照得比白天还要明亮。祖母这次显得特别美丽而高大。她把小姑娘抱起来，搂在怀里。二人在光明和快乐中飞走了，越飞越高，飞到没有寒冷、没有饥饿、也没有忧愁的地方去了——飞到了上帝的身边！

不过在一个寒冷的清晨，这个小姑娘却坐在一个墙角里。她的双颊如玫瑰般红艳，唇边带着微笑，她已经死了。在旧年的除夕之夜冻



死了。这个孩子带着很多要卖的火柴，身体僵硬地坐在那里。其中的一把火柴几乎燃尽了。

“她想给自己暖一下。”人们说着。没有人想过，她曾经看到过多么美丽的世界。没有人想过，她曾经多么幸福地跟着她的祖母一起走到新年的喜悦中。

智慧感言 ●

美丽的女孩已经在天国了吗？在那个鸟语花香的温暖世界，她可以体会到生而为人那份快乐和幸福了吗？让我们一起祈福，愿人间充满平安、幸福、快乐。



くさったりリンゴ

昔々、あるところに、仲のいいお百姓夫婦がいました。二人の家は、
屋根に苔や草が生えていて、窓はいつも開けっぱなし^①です。庭には番
犬が一匹いて、池にはアヒルが泳いでいます。季節の花が門を飾り、リ
ンゴの木も植わっていました。

ある日のこと、お母さんがお父さんに言いました。

「ねえ、お父さん、今日は町で市がたつ^②んだって。うちのウマも何か
と取り替えてきてくれないかい。あのウマは草を食べて小屋にいるだけ
だからね」

「それはいいけど、何と取り替える？」

お父さんが聞くと、お母さんはネクタイを出して来て、それをお父さん
の首に結びながら、ニコニコ顔で言いました。

「きまってるじゃありませんか。それはお父さんに任せる^③って。だっ
て、うちのお父さんのすることに、いつも間違いはないんだから」

「そうかね、そんなら任せてもらおう」

と、お父さんはウマに乗って、パッカパッカ出掛けて行きました。

「おや？」

向こうからメスウシを引いてくる人がいます。

「ありゃ、見事なメスウシだ。きつといい牛乳がとれるぞ」

お父さんはそう思うと、その人にウマとメスウシを取りかえっこ^④
てほしいと頼みました。

「ああ、いいよ」

その人はお父さんにメスウシを渡し、ウマに乗ってパッカパッカ行っ
てしまいました。お父さんはメスウシを引いて帰ろうかなと思いました
が、せっかくだから、市を見に行くことにしました。すると、のんびり
とヒツジを連れた男に会いました。

「こりゃ毛並みのいいヒツジだ」

お父さんは、メスウシとヒツジを取り替えようと声をかけました。ヒ
ツジの持ち主は、大喜びです。何しろ、ウシはヒツジの何倍も高いので
すから。お父さんがヒツジをもらってのんびり行くと、畑のほうから大
きなガチョウを抱いた男が来ました。

「あんなガチョウがうちの池に泳いでいたら、ちょっと鼻が高い^⑤なあ」
そう思うと、お父さんは早速、ヒツジとガチョウの取り替えっこをし
ようと言いました。ガチョウを抱いた男は、大喜びです。何しろヒツジは、
ガチョウの何倍も高いのですから。お父さんがガチョウを抱いて町の近
くまで行くと、メンドリをひもでゆわえて^⑥いる人に会いました。

「メンドリは餌はいらねえし、卵も産む。お母さんもきっと助かるぞ」

お父さんは、ガチョウとメンドリを取り替えないかと、もちかけまし
た^⑦。メンドリの持ち主は、大喜びです。何しろガチョウは、メンドリ
の何倍も高いのですから。

「やれやれ、大仕事だったわい」

お父さんはメンドリを連れて、一休みすることにしました。お父さ
んが、お酒やパンを食べさせてくれる店に入ろうとすると、大きな袋を
持った男にぶつかりました。

「いや、すまん。ところでその袋にや、何が入っているのかね？ 甘い
においがするけど」

「ああ、これはいたんだリンゴがどっさり^⑧さ。豚にやろうと思ってね」

それを聞くと、お父さんはいつだったか、お母さんがリンゴの木を見ながら、こんなことを言ったのを思い出しました。

「ああ、いっぱいリンゴがとれて、食べ切れなくてさ、いたんでしまうくらい、うちに置いていたら。一度でいいから、そんな贅沢な思いをしてみたいねえ」

お父さんは男に、メンドリといたんだリンゴをぜひ取り替えてほしいと頼みました。

「まあ、こっちはそれでもかまわないが…」

男は首をかしげながら、リンゴの袋を渡しました。何しろメンドリは、リンゴの何倍も高いのですから。お父さんはリンゴの袋を持って店に入り、お酒を飲み、パンを食べました。ところがうっかりしていて、リンゴの袋を暖炉のそばに置いたので、店中に焼けたリンゴのにおいが広がりました。そのにおいで、そばにいた大金持ちの男が声をかけてきました。

「気の毒に。リンゴを損しましたね」

「いやあ、いいんだ、いいんだ」

お父さんは笑って、大金持ちに、ウマがいたんだリンゴに変わった、と取り替えっこの話を聞かせました。話を聞くと、大金持ちの男は目も丸くしました。

「それは、奥さんに怒られますよ」

お父さんは、首を大きく横にふりました。

「いやあ、うちのかみさんはおれにキスするよ」

「まさか！ほんとにキスしたら、僕はあなたにタルいっぱいのお金をあげますよ」

大金持ちの男は、そう約束しました。お父さんは、大金持ちの男と一緒に家に帰りました。

「お帰り」

と、出迎えてくれたお母さんに、お父さんは大金持ちの男の前で話し
はじめました。

「ウマはね、まずメスウシ取り替えたよ」

「へい、そりゃお父さん、牛乳が取れてありがたいねえ」

「だがな、メスウシをヒツジに取り替えたのさ」

「ますますいいね。セーターが編めるよ」

「けど、ヒツジをガチョウと取り替えた」

「ガチョウはお祭りに食べられるよ。美味しそうだね」

「でも、ガチョウはメンドリと換えちゃった」

「ああ、運がいい。卵を毎日食べられるなんて」

「そのメンドリをいたんだリンゴと取り替えて、ほら、戻って来たと
こだ」

「わあ、幸せだ。だってさ、お父さん、聞いとくれよ。あたしはさっ
きネギを貸してもらいにお向かいに行ったんだよ。そしたら奥さんが、
『うちにはいたんだリンゴ一つありません』って断ったのさ。でも、どう？
今のあたしはそのいたんだリンゴを持っている。アハハハ、愉快だねえ。
こんないい気分は初めてだ。やっぱり、お父さんのすることに間違いは
ないねえ」

お母さんはそう言うと、嬉しそうにお父さんのほっぺたにキスをしま
した。それを見た大金持ちの男は、

「素晴らしい！なんて幸せな夫婦なんだ！」

そう言ってお父さんとお母さんに、約束どおりタルいっぱいのお金貨を
プレゼントしました。

Handwritten signature or mark.